

とく  
徳

ほう  
朋

ごうまん  
傲慢な生き方に気付かされる

宮城 顛しずか



みやぎ しずか

1931-2008

京都府出身。

真宗大谷派教学研究所長、  
九州大谷短期大学名誉教授  
を歴任。

宮沢賢治みやざわけんじが亡くなる十日前に、お弟子すじにあたる若い人に手紙を書いておられて、その手紙の中に、こういうことを書いておられます。「私の人生は失敗でした。何時間も大きな声で話ができ、風の中を自由に歩け、兄弟のために一円でも力になってあげることが出来る。そういうことは、できないものから見たら、まるで奇跡きせきのようなものです。それをできるのがあたりまえのこと、あたりまえのこととして生きてきた私の人生は、失敗でした。そういうことをあたりまえのこととして生きているかぎり、人生のほんとうの真実というものは、決して見えません」と、そういう意味のことを、最後の手紙の中に書いておられます。

私たちがあたりまえだと思っていることが、実は大変にありがたい事なのです。体が自由に動かせることが、どんなに有難いことか。動くことを当たり前と思って生きてきた、それはほんとうに人間として傲慢ごうまんな生き方だったと、私の友達ともだちは「傲慢」という言い方でいってくれました。しかし考えてみますと、私たちはほんとうに自分でできることを、当たりの事として生活しているわけです。そして病気になったり事故にあったりすると、そこで初めてそのことに気が付くのです。(中略)

和田欄しげし先生は今、八十三歳です。私はまだ六十八歳なのです。ですから和田先生の方がず

っと年上です。(中略) 三年ほど前にお会いしましたら、私の顔を見ていきなり「宮城さん、おもしろいね」とおっしゃるのです。「なにかおもしろいことがありましたか」と聞くと、「うーん、足が曲がらなくなっただね」と、こうおっしゃるのです。それから「耳が遠くなっただね」と、こうおっしゃる。それで、「そんなことがおもしろいのですか」といったら、「うーん、はじめての経験だからね。足が曲がらなくなるのはこういうことなのか、耳が遠くなったらこういう思いをするのかと、おもしろいね、毎日新しい体験させてもろとる」と、そういう受け止めをなさっているのです。そのような受け止めが出来る方ですから、あれだけお若いのでしょう。(中略)

ともかく、そのように年をとってきたということで、今まであたりまえにしていたことが、あたりまえでなかったということを思い知らされます。そこでそうなってみてはじめて、いかに若くて元気だったときに、自分のいのちを軽々しく、粗末そまつにして生きてきたかという事に気付くのです。今までの自分は傲慢ごうまんでしたと、なかなかそこまでは思えませんけれども、やはり私の友だちは、文字通り死を前にして、振り返ってみて、そういう傲慢ごうまんという言葉ことばを思われたのでしょう。



(『真宗門徒の生活に自信を持とう』)

仏教の教えは傲慢ごうまんな思い込みをしていると気付かせて、「本当の意味での」当たり前あたりまえに気付かせる事です。それによってどんな境遇きょうぐうでも生きていけます。(哲弘 拝)

この「徳朋とくほう」は仏教を拠り所よとしている方々の言葉に直じかに触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。

